

いけないと云はれる子の話

—「お母さま方へ」—

高島巖

子供の心を正しく育て護つて行かうとするならば、私共は先づ、子供には悪意はないといふことを考へねばなりません。

x

例へば、四つになる子供が、いかにも楽しさうに、指に唾をつけて、障子に穴をあけ、そこから、一こまか二こまの大きな穴をこしらへたといたします。

かういふ時、お母さま方は、きつと、云はれます。

「これこれ、しやうのないいたづらつ子ね、お父さまが折角きれいにお張りになつたばかりなのに、叱られますよ」

この時、子供は叱られるのがこわさに、穴をあけるのを止めるかも知れませんが、その實、子供の心では、悪いことをしたなとは決して思つてはゐないのです。それは、も

の十分もたたないうちに、又同じことを繰り返すことを見てもわかるのです。

子供は、自分の力がためてみたいのです。ばりばりと破れる紙の音が、たまらなくうれいのです。お父さまを困らせてやらうなどは、決して思つてはゐないのです。

x

又同じ子供が、部屋中一杯ごみを散らして、その中に坐つて、お父さまの大切な書物を、その中にある繪を、缺で切り抜いてゐたといたします。

お母さまは、かういふ時、きつとおつしやるでせう。

「これこれ、なんですな、こんなによごしてしまつて。今ねえやがお掃除をしたばかりぢやないの。……あら、そのご本、お父さまのご本ぢやありませんか。まあ、どうしませ

う」

お母さまは、もう、お父さまに御自分が叱られることを想像して、おろおろなさいいます。

「こつちへゐらつしやい」

そこで、若し、この子供が、お尻をまくられて、一つか二つぶたれなければ、よほどましの方です。

お母さまの側から見れば、この子供は二重の悪を働いたことになります。お部屋をよごしたことで、もう一つはお母さまのお父さまへの立場をなくしたことです。

ところで、私は、この子供の側になつて考へて見たい。

子供には、決して、もう一度ねえやに掃除をさせてやらうとか、又お母さまがお父さまに叱られるのが見たいとかさういつた氣持は、恐らく、少しもなかつたに違ひあません。ただ、おもちゃを、みんな出してあそびたかつたのです。たゞきれいな繪を切り抜いて見たかつたのです。もう一歩突込んで考へて見ますなら、自分にはこんなにおもちゃがたくさんある、といふ、所有することの優越感と、もう一つは、自分だつて姉さんやその上の姉さんのやうに、繪

を切り抜くことが出来る、といふ、自分の力への自信をたのしみたかつたのです。更に深く考へることが赦されるなら、前者の場合は、集めることよるこび、後者の場合は創作のよるこびに、したりたかつたのです。

×

五つの子供が、きれいな林檎を一つ持つてゐるといえます。

その時、お母さまが、それを半分妹に分けさせやうとして、

「ね、ベビちゃんにも半分分けておあげなさい。可愛相ですからね」

と云はれたといたします。

その時、子供は、きつと、

「いやだ、いやだ、いやだ、僕、自分のもの、他の人にやるのなんかいやだ」

と云つて、直ぐには、それを妹に與へやうとはいたしません。さういふ時に、お母さまが、「どんなに口をすくして妹を可愛がるやうに云ひきかせても、子供には、それが

わかりません。

この場合、決してその子供が悪いのではなくして、又、子供自身が利己主義のがりがりであるのではなくして、子供といふものは、始めから、自分を犠牲にして他人のことを考へるなどといふやうな、所謂高尚な考へを持ち合はせてはゐらないのです。若しお母さまが、そのために、この子は、ほんとうにいけない子だよ、とか、随分可愛げのない子供だ、とか云はれるなら、それは、お母さま方が、大人の道徳的な考へを子供に求めて居られるのでありまして、子供には迷惑至極なことを云はねばなりません。

五つの子供は、ただ、自分の食欲のために、それを食べやうとする一つの希ひしか持つてはゐないのです。若し、この希ひが悪い、いけないものだとするならば、それは、子供の食欲を否定することであり、極端な云ひあらはし方をすれば、子供の死を希ふことになります。

子供は、ただ、自分自身の希ひ、云ひ換へれば、神の意志を行つてゐるのに、大人は、それを、自分たちの都合のよいことのために、悪いこととし、又自分たちの勝手にき

めた道徳的善に對して、悪と稱んでしまふのです。

かうして、子供たちが、どんな小さなことでも、悪いことだ困つたことだ、とおさへつけられる度に、こんどは反對に、それを悪いこととして行ふやうになり、遂にほんとうに、困つた子供になつてしまふのです。

四つの子供に、障子に穴をあけさせたくないなら、それに代るべきものを與へればよいのです。お父さまの書物を切り抜かせたくないなら、それに代るべきものをあてがつて置けばよいのです。

五つになる子供の妹にも林檎を與へたければ、林檎を二つ用意すればよいのです。又一人に一つの林檎では、多過ぎるのなら、始めから二つに切つて半分づつあてがへばよいのです。

叱る前に。又、お説教をする前に。

林檎の場合、それがもつと悪く働けば、兄は妹を憎むやうになるやもはかられません。

「妹さへゐなければ」といふ考へ。

それは取も直さず、心の中で妹を殺してゐるわけです。

X

ここに、六つになる子供があるといえます。その子供が、ある時、かんな屑に火をつけたとする。そしてその火が、窓の障子にうつつて火事になりかけたが、早く見つけて大事に至らなかつた。この場合、その子供は、放火癖をもつ恐ろしい子供だといふことになる。

けれども、私共は、一歩進んで、何故その子供が火をつけたかといふことを考へた時、若し、次のやうなことがわかつたとしたら、どうでせう。

よく、キリスト教信者が、子供たちに地獄の火の話をおたします。その子供のお母さんもやはり、悪いことをさせないために、その六つになる子供に、しばしば地獄の火の話をしたとして、その子供が、その火について知りたいといふ希ひをいだいて、その實演をやつたのだと見た時、この子供のいたづらは、ただ悪癖だとしてのみ考へらるべきでせうか。私はむしろ、このいたづらは、彼の眞理を發見しやうとする尊い努力の現はれとして、その解釋に、新しい一面を見出したいと思ひます。

X

私の宅に、丁度今年六つになる女の子が居ります。この子は非常にけちんぼうです。

朝、新聞が参ります。この子は早速その中にはさみ込んである廣告を抜きだして、それを自分の本箱の中へたたんでしまつてしまひます。時々、私がおもちゃを買つて來てやります。例へば人形を。この子は、一寸その人形の顔のぞいただけで、直ぐに又自分の本箱へしまつてしまひます。新しい下駄を買つてやります。それもやつぱり、自分の本箱の中へしまつて、はげてひどくなつた下駄ばかりをはいてゐるのです。

「今日はお散歩ですから、いい方の下駄をはいてゐらつしやい」と云つても、

「あたし、これでいいの」

と云つて、やはり悪い下駄で我慢をするのです。

又、家内がお花を活けてみると、その側へ來て、餘つた花を、どんな小さな花でももつて行つて、ちやんとしまつて置くのです。

これを、ただけちんぼうな子供だと云つてしまふことがわたくしには出来ないのです。この子は將來、非常に秀れた蒐集家になるやもはかられないのですから。

大人が、つまらないと考へることも、子供にとつては、大きな眞理發見への道程である場合が非常に多いのです。

x

八つになる子供が、お父さんの時計をもち出して、これを、金づちでぶちこわしたといたします。恐らくお父さんは、火のやうになつて、子供をぶつかも知れませんが、

けれども、それが若し、子供の、何故時計の針がひとりでに動くのだらうといふ、疑ひの現れで、それがあつたとしたら、眞理發見への努力の變形であつたとしたら、私共は、子供の一生の努力を、十圓か二十圓の時計のために、ぶちこわしてよいでせうか。

いたづらは、多く、尊い眞理發見への努力の別の現はれである場合が非常に多いことを思はせられます。

子供は、大人の勝手にきめた道德的の生活になれてゐません。神の聲に生活しやうといたします。

私は、お母さま方に申上げたい。

少くとも、子供に對する時だけでも、人のきめた善悪でなく、子供自らの希ひに知らうとする、生きやうとする、生長しやうとする、そこから來る行ひに注意をはらつていただきたいと存じます。

x

五つになる、私の末つ子のことですが、三日程前です。朝食のあとで、みんなで柿を食べて居りました。

その時、私は、みんなには、縦に半分に切つて、やりましたが、その子供には、食べよいやうにと思つて、横に切つてやりました。

ところが、それがどうも氣に入らなかつたらしく、すっかりおこつてしまつたのです。私はどうもわけがわからなかつたのですが、他の子供たちが、その少し前に、柿を食べたら種を残して置いて、それをお庭へ植える話をしてゐたのです。ところが横に切られたのを見ると、種がすつかり半分に分かれて形が變つてしまつてゐるので、自分も他の子供たちのやうに、ちゃんとした種を残して置いて植えや

うと思つてゐるのに、お父さんは、ちつとも自分の氣持を考へて呉れない、といふのでおこつたのであることが、わかりました。

これなどは、私が、その時の色々な事情を察することに注意が足りなかつた一例で、全く、親として子供のさう云つた興味に對して、無關心であつたことを申譯なく思はねばならぬことがらでありまして、この種の罪は、私共日常随分たくさん犯してゐる罪ではないかと思はれます。

×

話が少しく別になります、子供はたいいてい、動物を可愛がります。犬でも、猫でも。

ところが、これを讀んで居られるお母さま方も、きつと御經驗がおありのことと存じますが、子供が犬ころなどを部屋の中へ持ち込んだといたしますと、

「なんですね、きたない、犬ころなんかをあげるところぢやありませんよ」と云つて叱りつけます。

この「犬ころなんか」といふ、不用意に發せられる言葉が、實は、子供には、非常に強く作用するので、小さなも

のに對する、愛情と云つたものに折角芽生え始めた心をつんでしまふやうなことになる場合が多いのです。

犬のはなしでは、先日獨逸から歸つて來た人のはなしですが、獨逸では、警察犬學校と云つて、警察で使ふ犬を教育するところがあります。そこで教育された犬は、犯人を探したりする時、人間などには考へることの出來ないやうな、おそろしい働きをするのださうです。

たとへば、ある人が一つの石をひろつてそれを遠くの石砂の中へ放り込むとすると、犬は、その人の香ひをかんでその石をちやんと拾つて來る。此調子で、犯人を探し出す若し、私共が「犬ころなんか」と云つて叱りつけるかわりに、かう云つた犬の特性を子供に聞かせるだけの餘裕があつたら、子供は、犬を愛する他に、「自分だつて」と云つて、色々な點にはげみを感じるかも知れません。

×

とにかく、あらゆるもの見方を、ただ外に現れてゐる形にとらはれず、その内側、その原因、更にその將來について、深く深く注意する必要があると存じます。(完)